

平成 30 年第 1 回岡崎市社会教育審議会会議録

日 時 平成 30 年 2 月 8 日 (木) 午後 2 時 00 分～午後 3 時 00 分
会 場 福祉会館 6 階ホール
出席委員 石 川 春 次 (元岡崎市立中学校長) 会長
野 田 光 宏 (元岡崎市立中学校長) 副会長
小 川 真奈美 (岡崎市小中学校校長会)
浅 井 博 人 (岡崎私立幼稚園協会会長)
菅 井 竜 司 (岡崎市 P T A 連絡協議会顧問)
水 野 達 (岡崎市学区社会教育委員長連絡協議会会長)
市 川 賀 三 (岡崎市子ども会育成者連絡協議会会長)
平 川 賢 次 (元公民館館長)
永 田 研 一 (岡崎保護区保護司会副会長)
後 藤 尚 代 (女性代表)
葉 山 栄 子 (一般公募)
浅 岡 悦 子 (一般公募)
事 務 局 社会教育課長 小野、社会教育課副課長 荻野
社会教育課社会教育係 大村、鳥居

議 事 1 あいさつ

2 議題

- (1) 社会教育審議会の公開及び議事録の公開について
- (2) 社会教育委員について
- (3) 社会教育審議会の年間活動計画について
- (4) 【審議 第 1 回】子どもをとりまく社会教育環境について

(1) 社会教育審議会の公開及び議事録の公開について

- ・社会教育審議会の公開及び議事録の公開について「岡崎市附属機関等の会議の公開に関する要領」及び「岡崎市附属機関等の会議録の作成及び公開に関する要領」に沿って事務局より説明を行った。

(2) 社会教育委員について

- ・「社会教育法」「岡崎市社会教育委員に関する条例」にそって社会教育委員の役割について、また岡崎市の社会教育の組織等について事務局より説明を行った。

(3) 社会教育審議会の年間活動計画について

- ・年間活動計画、県内視察研修の視察先、及び審議のスケジュールについて、事務局より説明を行った。また委員の研修への参加を要請した。

(4) 【審議 第1回】子どもをとりまく社会教育環境について

- ・審議を行うにあたって、事務局案として「子どもの定義（0歳から始まる家庭教育と義務教育終了までの社会教育）」、「分野分け」を提示し、「岡崎市の現状の子どもをとりまく社会教育の現状イメージ図」により説明を行った。社会教育に関する意見が下記のように委員より発言された。

委員：幼稚園に入るまでは、家庭でみてもらうことが大切、そういった意味で乳児は（0～2歳）、入れなくてもいいのではと思うが。

委員：平成18年度に教育法が改正され、それまでは家庭教育という分野がなかったがこれ以降、家庭教育の重要性が明記された、幼児教育を行っている立場からすると、就園前のご家庭の状況の影響は大きく、その後の成長過程においても0歳からの家庭教育は重要な点となるかと思う。

委員：先ほど、就園以降の世代と言ったが、やはり色々考えてみると乳幼児の家庭教育は重要と考えなおした。現在、私どもの団体では「大人が変われば子どもも変わる」と運営をしているが、役員をやるなら団体から抜けるといった事態が起きているところである。今後のことを考えると地域のコミュニケーションを勉強して団体運営をいかなければならないと感じている。

委員：イメージ図において各団体の役割が記載されており、様々な団体の関わりが重要であると感じる。定義されている、子どもの定義は事務局案のとおりがいいかと思う。

また、それぞれの団体の役割についても、この団体はここだけというしぼりではなく、もう少し柔軟に役割について考えていかないといけないとも思っている。

委員：学校での行事を行うときに感じるのだが、幼稚園・保育園の時代までは、わりと親御さんの参加が多い。しかし、小学校に入ると急に役員などの活動への参加が減ってくる。それでも行事のときは父親も仕事を休んでまで参加するが活動には参加しないのが現状。地元の中学校での工夫として、小学校で役員を受けたかたには、中学校ではなるべく役員をお願いしない。地域の多くの役員の提言でもあり、少しでも多くのかたに関わってもらうことを目指している。役員をやってみると楽しいと言ってもらえるので多くのかたに経験していただくことに意味がある。

委員：三つ子の魂 100 までという言葉、本当にあると子どもたちやその家庭と接

して感じている。核家族化が進んだことによって、人と関わるのをきらいのような状況がある。先ほど、りぶらの市民活動団体が 10 年前 200 であったのが、今では 500 もあるとの話であったが、小グループであれば活動できる。但し、大きな組織となり、我慢しないといけなくなるときらう。当団体では、親御さんの関わりが積極的で、こういうかたの中には、小学校、中学校でも P T A 役員をやって、その後、民生委員・児童委員となっていくかたもある。子どもたちにもこのような人との関わりを楽しむという経験を育てていきたいが、その年代が 0 ～ 3 歳だと思う。しかし、この年代の家庭教育は孤立している状態にある。0 ～ 3 歳の時に人との関わりが楽しいと経験できる機会が多くあることが、この先の成長にも大切だと考えている。

委員：子どもたちと関わっていると、親が子どもにかまっていられないということが増えてきている。小学校に入学したと同時に仕事を始めたり、シングルマザーになったりなど家庭の事情で余裕がない。また各種行事にも出られないと言われる。各種行事を行うにあたっては、その内容の見直しを求められることがある。

委員：社会教育のイメージ図がよくまとまっていると思う。子どもの定義について、自分の子供は 30 代でも子どもであるが、そんなことを言ってもいけないので、ただでさえ広い社会教育に関しては成人までぐらいが子どもだと定義するしかない。それでも乳幼児の家庭への家庭教育と、義務教育中、高校や成人までの社会教育は様々でどこかで区切らなければ膨大で、どこかで「えいや」と区切ることは必要に思う。

委員：このメンバーで審議をするには、この義務教育までがいいかと思う。乳幼児については難しい部分もあるので、幼児からぐらいがいいのではと思う。

委員：お孫さんの予定にあわせて行動をしている祖父母が多い。今はそういう時代だと思った。私たちの時代は、母親がこうした立場であったが、今は、母親は働いており、それもパートでなく正規社員。現代の家庭状況から勉強していかないと、ものを言えない状況となっていると感じる。

委員：子どもの定義は、乳幼児から 18 歳までと思うが、岡崎の社会教育として考えるならばとりあえず定義し、義務教育までとするのも一つ。個人的には高校生までは入れていいと思う。

また「子どもをとりまく社会教育環境」の「環境」とは何を指すのか、どうとらえていくのか条件も環境の一つ、その活用のされかたなのか、よくするためにはどうすべきなのか、施設やおかれている状況も「環境」だと思う。何が「環境」なのかも確認して進めていかないと方向性は見えてこないように思う。

委員：0歳からの家庭教育は外してはいけない。また母親にまかせるのが当たり前と言うことはやめていただきたい。国が「男女協働参画」を進めているが、いつのまにか萎んでしまっているのは、「イクメン」など男性の育児参加で盛り上がった時期もあったが、女性からしてみれば後が面倒というのがあったのだと思う。面倒だからやめるというのは、諸外国の「男女協働参画」と比べると淋しい状況である。

また上の年代についてであるが、ドラッグやSNS、また広げるとDVも含むことができる。そうすると高校生までは入れてほしいが、但し、広げると難しくなってくるので、今年は0から3歳、次は違う世代という方法もあるかと思う。

(5) その他

- ・次回審議会は5～6月に開催予定